

フランスの今を探る L'actualité Française



木下 恵美子

KINOSHITA Emiko

Abstract : C'est une petite présentation sur Nicolas HULOT du son biographe et ses activités. Nous, les Japonais s'intéressent l'actualité française. Et surtout comment Nicolas HULOT est devenu une conditature présidentielle française de 2012 autant que l'animateur et l'écologiste. À la suite de l'accident nucléaire de Fukushima en mars 2011 a évoqué sa conditateur ? Nous voudrions savoir comment il suit dans la bataille politique.

これはニコラ・ウーロ (Nicolas HULOT) の履歴、活動内容についての簡単な紹介である。日本人にとってフランスの現在の新しい動きは興味のあるところである。特に、ニコラ・ウーロがテレビの アニマター (番組製作者)、エコロジストという立場から、2012年の大統領選挙の候補者に至った経緯。日本の福島原発の事故の影響があるのか。これからも彼の政治活動を追いかけてみたい。

Keywords : Nicolas HULOT, l'actualité française, l'écologiste, politique, ニコラ・ウーロ、フランスの時事、地球擁護論者、政治

環境擁護論者 ニコラ・ウーロ (Nicolas HULOT) (1955～)

今、フランスでは、2012年の大統領選挙に向け、それぞれの立候補者へ鋭い目が注がれている。その中の一人、環境擁護論者 (エコロジスト) のニコラ・ウーロ氏が大きな話題を呼んでいる。

彼のプロフィールとフランス人の反応について少し紹介してみたい。

1955年4月30日、北フランス、リール市に生まれた。フランス人。テレビのルポルタージュ制作者、作家。ウーロは「私はエコロジストとして生まれたのではない。この地球上に生を受け、エコロジストになる必要性があったのだ」と明言している。

1987年からここ20年来、フランスの国営テレビTF1の番組「ウシュアエア(Ushuaia)」の制作に携わり、地球環境破壊問題に深く傾倒する様になった。「ウシュアエア」という番組のタイトルは、アルゼンチンにある地球最南端の町の名前から取ったもので、世界における評価の高いルポルタージュ番組である。未開拓地や原住民、その実情などを紹介している。

環境擁護論者(エコロジスト)として番組を通して人間が入り込み難い原生林、ジャングルや山間、深海底などの現状査察に挑んで取材を続け、原住民や自然保護の重要さを訴えている。ルポルタージュのために自分の身の危険を顧みず、かなりの冒険に挑戦する姿、その勇気は人々から称えられている。35年前から、地球は変わってしまったとウーロは強調。自然資源の破壊、公害問題、地球温暖化などに焦点を当てて強い懸念を表明している。

しかし、テレビ番組取材のための手段、ヘリコプターや各種機材の持ち込みによって、彼が逆に自然を汚染している面があるのではという批判も聞かれる。(フランスのラジオ、フランス・アンター(France Inter)のウーロへのインタビュー、人々の声をまとめた。)

ニコラ・ウーロの主な活動歴

—1980年、パリ・ダッカー(Paris-Dakar)のラリーに参加、野心ある冒険家を実証。

—1990年、「ウシュアエア基金」を設立。1995年には「ニコラ・ウーロ自然と人間のための基金」と改名。この基金を足掛かりに様々な地球擁護活動を行っている。2007年の大統領選挙では、その候補者の一人として世間から噂をされたが、結局立候補しなかった。この基金の名のもとにロレアル(L'Oreal)からウシュアエアというマークの化粧品などを出した。

化粧品会社とのつながりは自然保護見解と矛盾していると、ウーロのエコロジストとしての資質を疑問視する人達もいる。

—1996年、TF1の番組、「オカヴァンゴ(Okavango)」のルポルタージュを制作。

—2005年、「ウシュアエアTV」を開局。多くの地球保護番組を放映。

—2006 年、月刊誌「ウシュアエア」を編集出版。内容は TV と連携したもの。

—2008 年、「ル・ヌーヴェル・オブセルヴァター (Le Nouvel Observateur)」に取り上げられた記事ではウーロを地球救済の唯一の人物であると高く評価している。

—2009 年 10 月に、現代社会の不平等、資本主義、科学の発達などによる世界破壊を訴えた映画「ル・サンドゥロム・ドウ・ティタニック (Le Syndrome du Titanic)」を作成、上映。

この映画の題名は 1912 年、イギリスの豪華客船タイタニック号沈没の事故からイメージ化されたもので、文明的な進歩に楽観的な希望を託した当時の危機感を呼び起こそうとしているもの。2004 年に既に同名の著書を出版。アフリカや文明から遅れた島々などの未開発国、後進国、それと相反する先進諸国の人々の暮らしの実態を伝え、地球と人間保護を訴えたドキュメンタリー。多くの反響を得たが、ルポルタージュとしては、問題解決策があまり見えない政治的要素が濃過ぎるとの批判も免れなかった。この映画は残念ながら制作の真意を十分に人々に訴える強さに欠けていた。

日本の大震災による福島原発の事故を重く受け止め

—2011 年 2 月、原子力発電所を所有する EDF への反原発抵抗の態度を明らかにした。

2011 年 3 月、日本の大震災による福島原子力発電所の事故を重く受け止め、地球擁護の立場から 2012 年の大統領選挙の候補者として立候補を正式に表明した。今のところ無所属。緑の党からの支持が得られる可能性もある。フランスから原子力発電所を撤廃して行くべきだと訴えている。しかし、彼の政治的手腕については、必ずしも大きな信頼を得ているという訳ではないので、どれだけ彼への支持者が得られるかは難しいところである。選挙戦に向けて他の候補者と対比して色々な議論が飛び交っているのが現実である。

—環境擁護論を述べた記事、著書などが多くある。

* 注：上記ニコラ・ウーロの活動歴についてはフランスのインターネット「Wikipédia」を参照。

ニコラ・ウーロの今後とフランス

果たして、今後、ニコラ・ウーロによってフランスの政治変革がなされ、地球救済主としての力量が発揮されることになるだろうか。

フランス人の 60%が原発に賛成の意向を示している事実を忘れてはならない。そんな中、

メディアティックな彼の名前を支える同志者とどこまで食い込めるのか。

テレビスター的存在の裏に、確固たる政治理念と実践力がどれだけあるのかが問われている。

一般的にフランス人は政治に強い関心と自分の意見をはっきり持っている。夕食に自分の家に招待した人達との議論の果ては、政治にたどり着くことが多い。生半可な考えや意見だけでは彼らの仲間入りは出来ない。「沈黙は金なり」という諺は通用しないし、何も言わなければその人の知性或教養を疑われる。巧みに政治論を交わすフランス人の多くは、自分が大統領候補になれるぐらいに弁が立つのだ。あの美しいフランス語に酔いしれて、自分の意見が絶対であると自信ありげに主張する。

最近はずいぶん、ラジオやテレビでウーロへのインタビューが報道されるが、私の印象としてはユニークな候補者の一人であることは確かだが、線がやや弱い。政治家としての確固たる信念や理念がもう少しほしい。

私のフランス人の友人は、テレビの人気スターはその世界でとどまり、地球擁護活動は其中で続けるべきだと強調する。

しかし、ウーロへの評価は様々で、今後の彼の動きが大いに注目される場所である。今のフランス社会における話題人物の一人である。